

---

# 輝き出す原石

鳳圭介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

輝き出す原石

### 【Nコード】

N3887X

### 【作者名】

鳳圭介

### 【あらすじ】

高校入試であらゆるところに滑るに滑り、定員割れを起こしていた武偵高校に、泣く泣く入学した主人公、柳生天斗。興味もない銃を買い、嫌々日々を過ごしていた彼は、ある日命を狙われることに……。

## プロローグ

窓の外を落ち葉が舞っていく、11月の小春日和。『授業なんざ、ほつとけ』と、言わんばかりに机に突っ伏しながら、窓の外をのんきに眺めてるのは、俺こと、柳生天斗である。

いやしかし、窓際っていうのは良いもんだね。太陽があたって、程よい気温。クーラーもあるので、夏場に暑い思いも大してせずに済む。

まったく、みんなももう少し余裕をもって授業を受ければいいのに……。何をそんなに緊張してるんだい？

と思っていた俺の耳元で轟音が響く。

「なにやあ!？」

変な声と共に、飛び起きる。

そして、その視線の先いたのは……

「ら……蘭豹センセイ……」

「おう、やっと起きたか……」

まだ硝煙のなびくS & amp; W・M500を頭上に向けて構えている、わが校イチのキチイ先生、強襲科アサルトの蘭豹だ。

「えーっと、今日もいい天気ですね……?」

「その前に言うことあるんちゃうか?」

「寝ててごめんなさい……」

「そーかそーか、悪いとは思っとなるんやな……?」

「え?……あ、ハイ」

なんだろう、この人気のせいか青筋浮かべてるぞ?笑顔ですっごいいい笑顔なのに、青筋のせいでこの上なく恐ろしいことになってるんだが、気のせいなのか……?」

「じゃあ、グラウンド10周、一緒に走るか?」

「ええ……」

そんなに運動得意じゃないのに……。

また轟音が響きわたる。

「何か言ったか？ 暴発して聞こえやんだわ」

「イエ、ナニモイツテマセン。ヨロコンデハシラセテモライマス」

暴発なんてあんな状態でするわけないだろ、わざとだろ、わざと！

「そうかいそうかい、素直な奴は好きやで」

ああ、俺はなんでこんな高校に来ちまったんだ……？

そう、俺のいる高校は、『東京武偵高校』。

俺が最も来たくない高校だった。

グラウンドを蘭豹と一緒に走って（と言うか、鬼ごっこだった）教室に戻ってきたら、次の授業が始まっていた。

しかし、蘭豹のやつ、後ろからM500をぶっぱなしながら追いかけてくるなんて……。鬼だろ、リアル鬼婆だろ、アレは。

さて、教室に入って最初に目が行くのが、Eランク武偵の遠山キンジさんだ。彼は、俺のように、サボってEランクというわけではなく、一般科目では、かなり上位の成績を取っている。たしか、春の試験で休んだせいで、Eランクになったんだとか……。

さて、なぜ真っ先に目が行ったのか……。それは、俺がキンジさんのことを尊敬しているからだ。

Eランクでも、勉強をちゃんとして、人徳がそれなりにあって、そして何より同じ目標をもっている。

普通科高校への転入。それが、俺とキンジさんの目標。少なくとも、俺には変な趣味はないし、彼にもそんな趣味がないことを祈っている。

ともかく、彼には共感できるところが多い。が、話したことは1度もない。

何故なら、Sランク武偵の双剣<sup>カトラ</sup>双銃のARIA様が、休み時間毎に彼に話しかけてるからだ。俺みたいな奴は、Sランク武偵とは、話が合わないだろうしな。

それに対して、キンジさんはぶつくさ言いつつも話につき合っている。要するに、いい人なんだろう。しかも、ある1年生は、彼のことを『師匠』と呼んで慕っているらしい。人徳も、実力も、兼ね備えている人として、尊敬していると共に、俺は地味にライバル心を燃やしているわけだが、俺じゃ勝負にならん。

俺に人徳？無いよ。せいぜい、女子からいい人止まり程度で、頼み事をされる程度だ。

実力も、それ以前の問題でやる気がないし。

ああ、考えてたら悲しくなってきた。

寝よう。もう、何も気にせず寝よう。

そう思いながら、机につつ伏す。その状態で、窓の外を見ると、

視界の端……情報科の屋上で、何か光った。

「あれは……」

スナイパーライフルの、スコープの反射光だ。

「俺を見てるわけじゃないだろうし、気にしなくていいか」

そう言いつつ、目を閉じる。

そして、意識が暗い闇の中に堕ちていく。

「あいつが今回の目標か？」

「らしいな」

情報科の屋上に、2人の人影があった。

1人はシャイタクM200を構え、スコープを覗き込んでいる。

銃身の先端には、サプレッサーはなく、マガジンもはまっていない。

あくまで、鷹の目が目的のようだ。そのスコープの先には、いかに

も眠そうな顔をした少年がいた。

もう1人は、腰にハンドガンを吊っている、巨漢の男だ。銃はグ

リップしか見えないが、おそらくはDEだろう。それほどの大きさ

はある。

「しかし、あんな奴を殺せなんて、何を考えているんだろうな……」

と、巨漢の男が手元の資料のようなものを眺めながら、つぶやいた。

「余計なことを気にするな。俺たちは、依頼されたとおり、探し、

見つけ、殺す。それだけだ」

「そうだな」

そのとき、スコープの向こうで、少年がこちらをむいた。

「……………!?!」

「ばれたのか？」

「いや……バレていないはずだ……おそらくだが」

わずかな沈黙の後、スナイパーはM200のバイポッドを畳み、銃を担いだ。巨漢の男が身を翻して歩き出そうとした時、

「もう、見つかってるで、あんたら」

2人の男が戦慄した。

屋上の入口、そこに立っていたのは、

「蘭豹………」

「厄介な奴に見つかったな………」

2人が、憎げに顔を歪めるが、それを蘭豹は笑顔で流し、

「あんたら、今日は見逃してやつてもええわ」

「何？」

スナイパーが訝しげに聞き返す。蘭豹は笑顔を崩さないまま、

「逃がしてもええ言うとするんや。ほれ、好きなところ行き」

そう言つて、屋上の出口を開ける。

「何のつもりだ………？」

「今は特に気にしとらんだけや」

「フンッ………」

2人の男は、出口に向かって歩く。あくまで、背後の気配を気にしながら。

「ただし………」

ちょうど、ドアノブに手をかけた瞬間に、

「ウチの可愛い生徒に手を出したら、ただじゃおかないで？」

と、『狩る側』の声音で言い放った。

2人の巨漢は返答もせずドアを開け、出ていった。

残された蘭豹は、校舎の方を見ながら、

「これから忙しいなるで、頑張りいや、柳生」

その視線の先で、爆睡している少年を見ていったのか、それとも、見えずに言ったのか……。

今日の授業も終わり、特に一緒に帰る友達もない俺は、寮への帰り道を歩く。バスはあるが、俺は帰りは歩いて帰る。主に、お金がもつたいないからだ。

「しっかし、あの時、誰を見てたんだろ……。少なくとも、俺じゃないんだろうけどなあ……」

そう、あの時見たスコープの光……。あとで確認したが、あの時間帯、狙撃科スナイプの生徒は、授業には全員出席していたらしく、情報科インフォルマの校舎には教員しか残っていなかったそうだ。そして、その教員は全員、狙撃とは無関係な人だったらしい。

他にもいろいろと休み時間の合間に調べてみたが手掛かりはなく、結局は謎なままである。

とりあえず、もうそのことを忘れて、今日は早く寝ようかなと思いつつ、寮の階段をのぼり、自室のドアを開ける。

「ただいまー」

「……………あ、おかえりー！」

と、部屋の奥の方で返事が聞こえた。

俺のルームメイトで、装備科アムトの江坂洋介だ。

「今日の授業も寝てたのかー？」

……………こいつは、俺が帰ってくるたびこれである。まったく、俺がいつも寝ているような言い方だな。俺だって、起きている時は起きているぞ？

「そういうお前も、今日もルーズリーフに設計図書きっぱなしか？」  
そして、こいつはルーズリーフに『妄想』と称して、何かの設計図をかきながら、ハアハア言っている……………らしい。クラスが違うから確認はできないが、それはある意味、幸せかもしれない……………。

「おう、そっぴやお前の欲しがっていたブツが出来るかもしれないぞ」



「……………」

「欲しがっていたブツ？そんな危なそうなものを頼んだ覚えはないんだが……………」

「まあ、できたら渡すぜ。それまで楽しみに待ってな」

「おい、気になるじゃねえか……………」

「ハツハツハツハ、まあ、渡せばわかる（笑）」

「すっげえ気になる上、口答で（笑）って……………」

「まあ、いいや。そんな時になればわかるだろ。そう思いつつ、俺はキッチンに立つ。」

「おう、お前が料理作ってる間に、お前のファイブセブンのメンテしとくぜ」

と、後ろの方から投げかけられた声を気にせず、料理を始める。

俺がこの高校に来てしまった理由…………それは、あらゆる高校を滑って、滑って、さらに滑って。そして、定員割れを起こしていたこの武偵高校の探偵科インクスタに入学したわけだ。

しかし、入っていきなり銃を買って言われたときには、驚いたのなんの。

何も知らないまま、店に駆け込んで、『装弾数が多くて扱い易い銃』と言った結果、ファイブセブンを渡された訳だ。

ついでに、カスタムは全くと言っていい程していない。お金かかるし、面倒だし、そんなに執着ないし。

さて…………と、だいたい出来たかな…………。皿に『料理』を盛り付け、ダイニングに持っていく。

「なんだ、今日の夕飯は手抜きか？」

まあ、そういうのも仕方ないよな…………。

今日の夕飯は野菜炒めだ。簡単なレシピを言うと、レタス、ニンジン、エノキ、豚こまをフライパンで炒めて、塩とコショウで下味をつけて、そこにマヨネーズ、ウスターソースを入れて軽く混ぜてすぐに火を止める。それで出来上がりだ。手抜き以外のなんでもないが…………

「これでも美味いんだぞ？それに、お前が材料買ってきてないのが悪いんだろ？」

「いやー、お前だったら俺のことをちゃんと理解して、買ってきてくれるかなーと」

「そうかそうか、だったらお前も俺のことを理解して、朝早くに起きてくれるといいんだがなー」

「わかってないからお互いこうなってるんだよな？」

「そうだよな、ハッハッハッハ」

「ま、仕方ないよな、ハッハッハ」

お互いに、肩を叩き合いながら笑い合う。その方を叩く力がお互いにどんどん強くなっているのは気のせいか……………。

「というか、近くから見ているのならこの光景がシユールにしか見えなさそうだ……………」

「とにかく、飯はあるんだし、食おうぜ？」

「あ、洋介のやろう、話そらしやがって……………。でも、腹が減っているので、同意して飯を食う。」

「しっかし、むぐ、お前、むぐ、ファイブセブン使ってるのか？」

「口にモノを入れたまましゃべるな、唾を飛ばすな。それと、俺は銃はなるべく使いたくない。だから、使用回数なんて、1週間に1回あればいい方だ」

「道理でな。お前のファイブセブン、何回メンテしても、問題なんでありやしねえ。おかげで、メンテも楽だ。メンテ代取らないから、家事を任せるって、やっぱいい話だったなあ……………」

「そう、こいつは、俺からメンテ代なんて取ったことはない。しかも、こっちから依頼すれば、趣味がわりにいろいろな設計製作までしてくれるという、いい奴なのだ。代わりに、家事全般を俺が担当する羽目になっているのだが、もともと俺の親は厳しく、家事全般は小学生の頃には叩き込まれていたから、問題なく出来ている。」

「こんなふうに、持ちつ持たれつの関係で洋介とこの部屋に住んでいる。」

食後、2人で課題を片付けて、ゲームをしていたのだが、のどが  
渴いてきて、

「なあ、天斗、ジュース買ってきてくれないか？」

「自分の分くらいは金出せよ？」

「わーってるよ」

と、言うことで、寮の1階にある自販機までジュースを買いに来て  
いた。

のだが……

「柳生天斗だな？」

やたら体のでかい男に絡まれていた。

さて、何が起きた？

俺は普通にジューズを買いに来たのに、なんでこんなどう考えても生徒ではないような男（教員でも見たことがない）に絡まれているんだ？

寮の階段を、降りて、自販機で洋介に対しての囁やかな悪戯として、夜中にあえて『朝専用、スッキリ爽快！ブラックコーヒー』という銘柄のコーヒーを買って、自分の分はあったかいコーンスープを買って。そして、寮の階段を登ろうと思ったときに、背後から

「柳生天斗だな？」  
と、声をかけられたわけである。

男の特徴は、体がでかく、服装は全体的に黒。コートを羽織り、顔はどこぞの秘密結社のごとく、サングラス……. にはしてはゴツイ物と、帽子で半分以上隠されている。

「ええと、そうですね、一体なんでしょうか？」  
という、俺の疑問に答えるつもりがないかのごとく男は懐に手を伸ばす。

まさか、銃でも出してくるんじゃないかな…….……。なんて、武偵校だったら出てきてても仕方ないんだっけ？俺が単純にエンカウント率が低いだけだろうしな（まあ、蘭豹のことは省くが）。

で、出てきたのは？

デサートイグル

DE……. マジで銃が出てきやがったよ。

「何のつもりだ？」

その疑問に対して、その男はたった一言、

「お前を殺す」

とだけ、答えた。その言葉には、情も、興奮も、狂気も、雑念と呼

ばれるそれがなく、ただひたすらな殺意が備わっていた。

その瞬間、鳥肌が立った。体が動かず、声も出ず、呼吸は荒くなり、鼓動も早くなる。思考する余裕もなくなり、周りの音が遠く聞こえる。視界が目の前の男と、その男が握る黒い塊に絞られる。

男がDEのセーフティを外す。

俺……………死ぬだろうか……………。

男がDEを俺の頭の当たりに向けて構える。

せめて、最後は病気で、病院で家族に囲まれて死になたかったなあ……………。まあ、そんなこと言うには、早い年齢なんだろうけど。

男の、引き金にかけた指が力む。

……………シニタクナイ……………。

男が引き金を引く寸前、俺は体が勝手に動いていた。身を低くして、前に走り出す。

男の顔が驚きが変わっていくのが、ひどくゆっくりとした動きに見えた。そのまま、男が引き金を引くのも見えた。

轟音とマズルフラッシュ。弾丸なんてものが見えるほどの動体視力は無いが、その弾丸が通ったあとの音の壁……………のようなものが自分の顔の数十センチ右を通っていくのをかろうじて見た。

俺は、その男の脇を走りぬけ、ひたすら走る。

咄嗟にファイブセブンを探したが見つからず、携帯も自室に置いてきたのを思い出し、そのまま男の後方へかけていく。

男が振り返ったときには、俺はすでに女子寮の階段を登っていた。女子寮の屋上、そこに行って俺はやっと落ち着いた。

息が上がって、喉が乾いた。だが、いつあの男が戻ってくるかわからない以上、下手な行動は出来なかった。

しかし

「また、これで救われたな……………」

『これ』とは、俺の子供の頃からの……………まあ、なんだ、かつこよく言えば、特殊能力みたいなものだ。

危機的状況になると、野生動物並みの本能と、火事場の馬鹿力と、一時的に瞬発力、反射神経が上昇する。

子供の頃、車にひかれかけたときも、喧嘩で、相手が大きな石を投げつけてきたときも、『これ』のおかげで助かった。そして、あのときも…………。

ただ、この状態になったあとは、大抵体のどこかを壊す。で、今回は……………奇跡的に問題なしか……………。

そのとき、屋上の扉がゆっくりと、しかし、確実に開かれた。

「誰だ!？」

と、無い銃を探りながら、開いた扉の先の闇に向かって問いかける。そこに、真つ白な光がともった……………いや、懐中電灯……………なのか? いや……………

「まさか、本当に男が女子寮に入ってきてたなんてね。さっきの銃声もあなた?」

扉のむこうから現れたのは……………女子寮だから当然女性。髪型はセミロングで、頭につけたカチューシャが何かの光で反射する。月が出てきて照らされた手には、センチメートルマスターが握られていた。しかし、センチメートルマスターにはレイルは付いていなかったはずだから、ドーン・プレジションのスピードレイルを使ってるんだろうか。下部にレイルが付いている。そこには……………インサイトM6Xだろう、フラッシュライトの明かりがやけに眩しい。

「……………敵じゃあ……………ないのか?」

「敵って、さっきの銃声?お遊びでもしてるの?」

「そうじゃなくて……………」

本当のことを言ったところで、信じてもらえるわけもないだろう……………。

そのとき

「まったく、どこまでいけば気が済むんだ」

と、さっきの男が屋上にまで上がってきた。

「誰？このおっさん」

「君で言う、お遊び相手ってやつかな………」

「じゃあ、さしずめ鬼ごっこってところかしら？」

まったく、こっちはお遊びじゃないってのにな……。

「まあ、そういうことだな」

と、苦笑しながら答えると、その少女は真面目な口調になり、

「あなた、武器は？」

と聞いてきた。

それに対して俺は、ホールドアップお手上げで答えた。

「ま、寮から少し出るくらいで銃を持つなんて、よっぽど優秀な人だけだからね」

「そういうことだ」

「でも、今度からは持ち歩いたほうがいいわね」

「だな」

そう言い、目の前の男に意識を集中する。

男は苛立ちを含めた声で、

「話はまとまったか？」

と聞くが、少女が

「まず、まとめるような話でもなかったわね」

と、笑いながら流す。

俺は、少女が話を持たせている間に、周りを見回す。武器がない俺は、逃げることしかできない。

腰のベルトにはワイヤーがあるが、あくまで逃走用だし、もしこれで女子寮を下りようものなら、次の日には変態扱いのオンパレードだろう。大体、よく考えたら長さが足りない。

ということとは、俺には、武器も逃げ場もないわけだ。だから、今すぐにも武器が欲しいわけだ。が、周りを見てあったものが、余っているのか、地面に置かれた物干し竿、石ころ、ボロ雑巾、真っ黒な軍手。

せめてもう少し……もう少し何かあれば……。

……ない。何も無い。諦めた。

仕方なく物干し竿の方に動こうとするが……

「お前の行動なら、丸見えだぞ、小僧」

バレていた。というか、名前から『小僧』になったぞ、呼び方。

「ありやいやー、じゃあ、頑張つてよけてねー」

と、少女が言ってから、一気に駆ける。

そのかける最中に、レーザーサイトの光った箇所……左足の足首、右足の太ももに向けて銃弾を1発づつ放つ。それを男は大きく躲し、DEを俺の方に向けて撃とうとした。が、それを少女の発砲によって止められる。

俺はその間に物干し竿にダッシュする。豪音が響く中、もう少しで物干し竿に手が届くところで男が、今度は俺に向かって、胸の当たりを狙いつつ、DEを撃ってくる。

そして、また来る『あの』状態。音の壁のようなものが、かなりなスピードで近づいてくる。それに対して、俺はスライディングして、物干し竿をつかむ。

弾丸が頭上数センチを通り抜けたのを気にせず、俺はコンクリートの上を滑りながら地面に手を付きつつ立ち上がる。

それと同時に、戦っていた2人が距離を置く。

男が笑いながら、

「よく手に入れたもんだ。で、それでどうするつもりだ？俺を叩こうっていうのかい？」

と言ってくるもんだから、俺は一言、こう答えてやる。

「ああ、お前には、これで十分だ。」

と言いつつ、長い物干し竿を槍の要領で構える。

「ほざけ！」

と言つて、俺に向かってDEを発砲してくる男。

狙っているのは、頭の、しかも額の真ん中。男の目と銃口が物語っていたのを頼りに、体をわずかに反らし、物干し竿の真ん中あたり



をその軌道上に持っていく。

轟音と同時に、物干し竿が、きれいに半分に分かれた。その衝撃で出来た破片の1つが、俺の頬に一筋の傷を残して飛んでいった。

「……………なん……………だと？」

「嘘でしょ…………？」

と、男と少女が驚いているが、気にしない。

俺は、別れた物干し竿の片方を持って、驚愕している男に向かって走り出す。

男は驚きつつも銃を発砲する……………が、銃口が全く違う方向を向いている。このまま走っても問題無いな……………。

俺の予想通り、マズルフラッシュと轟音が響いても、弾丸が風を切る音は左方向に流れていった。

俺は、そのまま至近距離で、男の手のDEに向かって物干し竿だったものを逆袈裟に振り上げる。

男の手からDEが離れ、宙を舞う。

そのまま、俺は一回転しつつ、男の頭部を死なない程度にぶつ叩く。その衝撃で男がよろめく。

その間に、背後に周り、ちょうど落ちてきたDEを少し遠いところに蹴飛ばして、足に力を入れる。男が振り向こうとして、俺から見てちょうど男の横顔が見えたところで俺は跳ぶ。そして俺は、男の首筋にごくごく弱く、しかしある程度強く物干し竿を振り下ろし、すぐに首筋から離す。

すると、男は白目をむいて倒れた。

手刀打ちていとううちのそれを道具でやっただけのことだ。

「こんなもんかな？」

と、俺は言った。

ついでに、近くにいた少女は、呆然と、俺の姿を見ていた。

結局、男を気絶させても、拘束するものもないので、少女の携帯で拷問科の綴タキユラ 梅子を呼んでもらった。が、ぶっちゃけ、俺はこの先生が大嫌いである。

授業中に寝ていたら、ハイヒールで足に徐々に力をいれてくる。そうするとどうなると思う？

ガマの油取りという話をご存知であろうか。カエルから油を取るのには、水から徐々に加熱して、カエルが温度上昇に気がつかないまま死んでいくという話である。それに近いもので、寝ているという鈍い状態で、足に徐々にヒールがめり込む……。痛さに気がついて起きたときには綴はすでに机から離れていて、授業の後にそこを見たら無残にも、真っ赤になっているという話だ。

ああ、思い出しただけでも恐ろしい……。とにかく、そんなことがあったせいで、俺は綴が嫌いになった。

寝ないように自分の中で誓ったが、起きていても、こいつの授業自体が拷問のようなものだった。

ゆつくりを通り越して、のっそりとした喋りと、途中のあくび。さらには授業中にどう考えても、タバコじゃないような臭いのタバコを吸っている。

ついでに、一部のやつは、わざと寝たフリをして、足を踏まれるたびに恍惚とした表情になる。要は、Mと言う奴だろうな……。少なくとも、俺にはそんな趣味はない。

さて、綴が来たは良いものの、ものすごく眠そうで、しかも、男を見た瞬間、あからさまにめんどくさそうな顔を見たが、その男を引きずりながら、女子寮の扉を出ていった。相変わらず、あの細腕のどこにそんな力があるんだろうか……。

さて、俺も帰るかな……。

「ちょっと、あなた待ちなさい」

「……………俺？」

「以外誰がいるのかしら？」

「……………」

まあ、居ないもん。他に誰もいないもん。

「えっと、あ、そうだ、助けてくれてありがとう」

「どういたしまして」

「じゃあ、俺はこれで……………」

さて、早く帰って、洋介にこの冷めた『朝専用、スッキリ爽快！ブラックコーヒー』を渡さない……………。

「だから、ちよつと待ちなさい」

「……………えっと、何のようでしょうか？」

そう言うと、少女は頭を抱え込んだ。

どうしたんだろう、頭でも打ったんだろうか……………？

「あんだ、名前も何も名乗らずに行くの？馬鹿なの？死ぬの？」

「いや、名乗っても、すぐに忘れられるだろうし、こつちから勝手に名乗ったら、嫌われるだろうし……………。というか、『死ぬの？』

って、死なないよ！？」

「とにかく、名乗りなさい！今すぐ！」

なんだろう、すつごいイライラしてるように見えるなあ……………。とりあえず、名乗ったほうがいいのか……………。

「柳生天斗、探偵科の2年生。ランクは……………」

「ああ、ランクはどうせSとか、そのへんでしょう？」

「いや、Eだけど？」

その瞬間、沈黙が流れる。

「え……………？」

「いや、だから、Eランクだよ？俺」

「はあああああああああああ！？」

いや、そんなに驚くことなんだろうか……………。少なくとも、俺は自分の運動神経は悪いと思っっているし、授業態度も悪いと自負してるし、テストは赤点ギリギリだし……………。

「なんで？試験でも休んだの？本気出してなかったの？それとも一体何！？」

「いや、授業とか、眠いから寝てるし……………」

「体育とかは？運動神経は？」

「体力テストの結果はBと、ここでは低い目。特に秀でたものもないしな。それ以前に、やる気がない」

少女がまた絶句していた。

俺には些細なことなんだが、少女にとっては驚くようなことらしい。

「なんであんな反射神経でEランクなのよ、どれだけやる気のないよ、宝の持ち腐れじゃない……………」

何かブツブツ言っているが、気にしないで帰ってもいいんだろうか……………」

とりあえず、屋上の扉に向かって歩こうとしたら、

「だから、待ちなさいって！」

また呼び止められた。

「今度は何？」

「あんだ、私の名前聞いてないでしょ？」

そういえば、そうだった……………。が、

「聞いても、すぐに忘れるだろうし、何より、君はSランクでしょ？俺はSランクの人とは普段はあんまり関わることはないし、良いだろう？」

そう言い放って、屋上の扉を開ける。

階段を降りているときに、

「強襲科アサルトの野田雪穂よ、覚えておかないと承知しないんだからね！」と屋上から聞こえてきた。

俺は気にせずに階段を下りていった。

部屋では洋介が寝落ちしていた。そののんきな顔が気に入らなかつたので、腹の上に『朝専用、スッキリ爽快！ブラックコーヒー』

を落としてやると、

「ぐほあ!?!」

と奇声を発して飛び起きた。

「おはよう、洋介」

「おお、おはよあ」

まだ寝ぼけている洋介に、コーヒーを開けて差し出した。

洋介はそれを一息に飲んで、

「ブホア!」

吐いた。

「て、てめえ、なんて事しやがる!?!」

「朝専用のコーヒーを真夜中に飲ませただけだが?」

「せめて文字通り朝に飲ませろ!」

「ッハッハッハ」

俺は、笑いながら思っていた。

自分の知っている日常は、まだ健在だと。少し前に命を狙われたことなんざ、ただの夢か幻覚だと。そう思っていた。

でも、既に俺の日常はぶち壊されていたことには気がつかなかった。

#### 1 - 4 (後書き)

えっと、学校がテスト期間に入ったので今回のこれを投稿したあと、多分1週間ほど休みをもらいます。

## 1 - 5 (前書き)

テスト期間終わってないけど、1週間くらい経ったし、投稿してもいいよね！？(と、テスト赤点直行フラグをたててみたり……………。

次の日、昨日の夜のことなんざ、きれいさっぱり忘れて学校に登校した俺。

登校して早々に、机に突っ伏す。昨日の『あの』状態は、体を壊すとともに、精神的にも疲労が尋常じゃないのだ。しかし、そのことすら忘れてるわけだが……。

そして、俺の日常は、次の瞬間きれいに消し飛んだ。

「このクラスに、柳生天斗って奴いるー？」

……なんだろう、この声、すっごく聞き覚えがあるのに思い出せん……。

まあ、いつか。俺のこと呼んでも、今は寝てるから帰ってくれろだろうな……。

と、思っていたら机を蹴られた。

あくまで、軽く……ごく軽く蹴られた。

だから、無視をした……のだが、次はかなり強く蹴られた。

……起きたほうがよさそうな気がしてきた……。

薄目を開いて、机を蹴った主を見てみると……、うわ、黒髪で美少女で頭につけた黄色い力チューシャの程よいアクセント。笑顔がよく似合いそうな子なんだが、今は無表情で青筋が……。蘭豹ほどじゃなくても、すごい怖い。

よし、起きよう。そうしよう。そう思って、体を起こし始めたのだが、それと同時に、少女が思い切り足を振り上げる。ちょ、待て、俺起きてるぞ!?

その思いもむなしく、俺が起きて軽くなった机に、その少女のフルパワーであろう蹴りが炸裂した。

「ぐぼはあ!？」

結果、俺の腹に机がめり込む形になった。

腹を抑えて机にうづくまる。というか、どんだけ力込めたんだよ



……。

「あれ？起きたような声が聞こえたけど、気のせいだったのかな……。仕方ない、もういっぱ……。」

「ちよ、起きてる、起きてるから！」

足を振り上げていた少女への静止も間に合わず、俺は机を腹にめり込ませながら吹っ飛び、意識を失った。

意識の沈んだ暗闇の中、過去の記憶の断片が頭を流れる。壁に飛び散った赤い『何か』。床に倒れている『誰か』。そして、床に倒れているその『何か』に突きつけられる黒っぽい『何か』。誰かの叫ぶ声。誰かの笑顔。そして最後に聞こえたのは、

『おかえりなさい、お兄ちゃん』

なんだろう、体が痛い。主に、後頭部と腹部が……。まるで何かにぶつかったような……。

「ん……………」

目を開いて、最初に目に入るのが、まっさらな天井。少なくとも、寮の寝室じゃない。

「ああ、起きたのね？」

と、覚醒してきた耳に少女の声が響く。

その声に対して、俺は……。

「誰……………」

こう聞くしかなかった。

少女は嘆息しながらこう言った。

「あんた、昨日のこと忘れたの？馬鹿なの？死ぬの？」

なんだろう、この話し方にはすぐく覚えがあるのに、なかなか思い出せない。

その少女は頭を抑えながら、

「仕方ないからもう1度名乗るわ。野田雪穂よ、今度忘れたら承知しないわよ？」

「えーっと、もし忘れたら……?」

「蹴る。蹴って蹴って蹴りまくるわ。いいわね?」

その少女……野田さんの言葉には有無を言わせない覇気があった……。だから、俺はごく自然に

「は……はい」

頷いてしまった。

それに対して野田さんはニンマリと笑い、今度は真剣そうな表情に戻る。

「で、さっきまでの口ぶりだと、昨日何があったかも忘れた?」

「うん、綺麗さっぱり、何もかも」

「でしょうね……」

また彼女は頭を抑えながら、こんどはため息を漏らした……。

「昨日、命を狙われたの覚えてる……?」

「そんな馬鹿な!？」

「なんでだろう、記憶喪失の人よりタチが悪い気がするわ……」  
「気のせいかな、今すごい馬鹿にされた気がする……」。

「あなた、馬鹿?」

うん、気のせいじゃなかったよ……。

少女……野田さんから聞いた話では、俺は昨日、素性も知れぬ男に命を狙われて、何故か女子寮の屋上に逃げ込んだ俺と、野田さんが出会い、一緒にその男を倒したんだとか。そして、その時に、人間技とは思えないものを俺が見せたらしいので……  
「チームを組んでくれるかしら？というか、組みなさい。さもなければ蹴るわよ？」

……んな、無茶な……。  
「俺みたいなEランクの雑魚とチームを組んでたら、命がいくつあっても足りないぞ？」

「別に私個人は強いから、あなたが一人での垂れ死ぬが落ちじゃないかしら？」

……最もなお言葉です。でも、さすがにドヤ顔までしなくても……。  
「あー、ほらほら、鼻の穴が広がって可愛い顔が台無し……ん？足を振り上げて……」

「ふんっ！」

「ぐふう」

蹴られた。

「なんで今俺けられたんだ!？」

「なんだか馬鹿にされてた気がするから」

「……………」

さらりと言いやがって……しかも、事実だから言い返せないし……  
……。

「で、組んでくれるの？それとも、蹴られて無理やり服従させられるのがお好み？」

「どちらもお断りします」

即答である。しかも、否定である。これ以外に選択肢があるものか。俺はMじゃないんだし。

「そう、じゃあ一緒に……………は？」

「だから、お断りします」

「はあああああああ！？」

「そんなに驚かなくても……………」

というか、このやり取り……………。ああ、思い出した。

「あー、君が昨日のあの人だったわけね……………。思い出したよ」

「今更感満載！？」

野田さんはよく驚くなあ……………。そんなに驚くことでもないだろうに……………。

しかし、昨日いろいろあったのを思い出して、ふと思った。

「で、昨日、綴に引き渡した『あいつ』は？」

そう、昨日襲ってきた相手を、俺が昏倒させて、その後に綴りに引き取ってもらったはずなのだが、その情報が未だにない。あの先生がどんなにめんどくさがりでも、そろそろ報告があってもいい頃なんだが……………。

「ああ、そうだった。本題を忘れてたわ」

「俺を引き入れるのが本題じゃないんだな……………」

まあ、薄々そんな気はしてたけども……………。

しかし、あの男、どうなったんだろう……………。舌でも噛み切ったのか？それとも、未だに『あの』綴のごうも……………尋問に耐えているんだろうか……………。

「あの男なら、脱走したわ」

「……………どういうことだ？」

「今日、綴がほんの少しの間だけ目を離したらしいの。その間に逃走したって聞いているわ」

「そんな馬鹿な……………」

綴が目を離すなんて言っても、あの部屋には監視カメラもあったはずだ。その状態でどうやって……………。

「監視カメラで見ても、何が起きたのかわからないそうよ」

「なんでだよ、さすがにどこかに登っていくとか、扉から出ていく

映像くらいあるだろう!？」

思わず声を荒らげる俺。冷静さなんて吹き飛んでいた。昨日の、純粹な殺意。その感覚を思い出してか、背中から汗が吹き出す。また殺されそうになるかもしれない。その恐怖が、俺の冷静さを奪う。

それに対し、野田さんは

「落ち着きなさい」

と、それだけの言葉を言った。それだけなのに、さつきとは違う覇気のようなものを感じて、自分の頭が冷えていくのを感じた。

それを見て野田さんは続ける。

「監視カメラに、一瞬だけ、白いもやがかかったそうよ。しかも、ごく薄く。まあ、一瞬といっても、本当に1秒ほどだけど。そして、もやが消えて男も消えていたそうよ」

「……そんなの、人間にできるものじゃない……なら……」

「『ステルス超能力者』……か？」

「でしょうね。さすがに、扉を出ていく音も、壁を登ったり、ジャンプしたり……それどころか、一切、動く気配がなかったそうよ。

それは、インフォルマ情報科の中空知さんも証言してる。『まるで、もやと共に人が消えていったようです』って、驚いてたわ」

「まったく、人外の方の相手はお断りだつてのに……」

しかし、妙だな……。そんなに早く消えるなら、俺たちの前から逃げるのに使えばいいのに……。気が動転して使えないなんてことはないだろうし……。何か条件でもあるのか……。？それとも……

「仲間が……共犯者がいる可能性があるのか……?」

「それが一番ありえそうね」

「そうか」

仲間がいるということは、俺の命を狙っている奴がまだいるということだ。

「……大丈夫かな……俺」

「そのために私に来てるんじゃない。それとも、私以外に人望でも

あるの？」

と、彼女が意地の悪い笑顔で言ってくる。

少なくとも、反論は出来ないな……。友達いないし……。人望なんて皆無だし……。

「……………俺みたいなのとチームを組んで、あんたにメリットはあるのか？」

「特にないわね。ただ、私はそういう前衛フォワードの仲間が欲しかったのよ。私の仲間と言えば、情報や、鑑定の方に寄った人しかいないしね」

「だから、昨日も言ったが、俺のランクはEだ。少なくとも、あんたみたいなSランク武偵の隣に立つには荷が重いと思うんだが……

……」

その瞬間、彼女の目が怪しく光ったのは、気のせいか……。少なくとも、俺にとっては気のせいじゃないんだが……。

「あなたは、弱いわけじゃないわ。ただ、自分の才能に気がついていないだけ。それを一緒に開花させるつもりはない？いえ、あえて言うわ。開花させなさい」

俺はもうため息をつくしかなかった。そうするしかないほどに、その時の野田さんは、嬉しそうで、その笑顔は輝いているように見えた。

彼女は、ベットで座っていた俺に対し、手を差し伸べつつこう言った。

「……………いつしよに、原石を磨きましょうよ」

こんな時だけ、そんないい笑顔になりやがって……。そんな顔で言われて、拒否なんてできるかよ……。

俺の日常のベクトルは、以前とは正反対方向に……。騒がしい方向に全力で向かっていくんだろうな……。

でも……………それも、悪くはないか……。

## 1 - 6 (後書き)

テストが終了しました。よって、またちゃんと投稿を始めますので、よろしくです。

結局、俺は野田さんとチームを組むことになった。が、チームを組んでから激しく後悔した。

野田さんのランクはS。そこまでは良かった。問題は……

「ねえ、あなた次はどこに行くの？」

「こんな……」

「あ、ちよつと待ちなさいよ！」

「こんなに……」

「あ、どこ行つたのよ、あいつ」

「なんでこんなにべつたりなんだよ!？」

「あ、いた」

「しまった、見つかつたか!？」

「ふう、何してたのよ、後ろ振り返つたらいきなりいなくなつてて驚いたじゃない」

「あ……ああ、悪い、急にトイレに行きたくなってな……」

「ふーん？手、洗つてきた？」

「も、もちろん!」

それ以前の問題でトイレ行つてねえよ……。しかし、なんでこんなにも執着してくるんだろ……。まさか、このまま寮にまで突入してこないだろうな……。

「おじやましたーす」

突入されました。

「はいはい、どうぞー。つて、何ナチュラルに上がり込んでんだよ!？」

「いいじゃない。なんでか男子寮に住んでる女子も何人かいるし」  
「どこのどいつだ、そんな面倒なことをしているのは……。今すぐ教務科スタッフに言いつけて来て……」





洋介が出てきて……………おい、こいつを見た瞬間に固まったぞ？

そして、指を震わせながらこいつを指さして、

「なあ、天斗、その方は、まさか野田雪穂様では……………？」

いや、様付けは無いだろう……………。というか、

「なあ、お前はそんなに有名なのか？」

「あなた、私のことは名前で呼びなさい？雪穂とそのまま呼んでもいいけど？」

と、さも嫌そうに、聞いてもいないことを、さらに質問で返しやがった……………。

「じゃあ……………雪穂、お前って、そんなに有名なのか？」

「ああ、Sランクにもなってくると、嫌でも目立つのよ」

「そ……………そうか」

というか、こいつもSランクなら2つ名くらいありそうだが、なんなんだろうな……………。まあ、この流れだと洋介が答えてくれそうだな……………。

「おい天斗、お前その人が誰か知ってるのか？」

「いや、名前と使ってる銃くらいしか知らん」

それ以外には、べつたりした性格ってことか？言わないけど。言ったら蹴られそうだし。

それに対して洋介は、未だに指を震わせながら、震える口でこう言った。

「野田雪穂 『ガーディナー 守護者』……………。付き人を死なせたこと

はなく、裏ではかなりでかい奴まで守りきったという記録がある。

しかも、護衛対象も、自分自身も無傷で……………。天斗、お前、何をしたんだ？」

洋介の言葉に俺は絶句した。

唯一、雪穂だけが笑顔だった。

「えーっと、雪穂は……、俺を護衛するんじゃない、俺とチームを組んだんだよな？」

俺は、目の前にいる野田雪穂という、ある意味で心強いが、いろいろ不安な美少女に声をかける。

「ええ、そうよ」

さらりと返しやがる……。

「じゃあ、俺のことは守らない、と？」

「そういうわけじゃないけど、護衛とまではいかないってだけよ」  
その言葉を聞いて、俺は安心した。少なくとも彼女は俺から金を取ることはできないようになる。

俺は、民間の依頼クエストの中でも特に規模が小さくて、楽なものをして  
いるせいで、金が少ないのだ。

しかし、じゃあなぜここに泊まる必要があるのだろうか……？

「なあ、なんでここに泊まるんだ？護衛が目的じゃなければ、別に部屋が離れていても仕方ないだろう？」

「だって、普段どんな生活をすれば、あんな反射神経にまで鍛えれるのか気になるじゃない」

と、あっけからんという顔で雪穂が答える。が、俺は特に特別なことをしているつもりはない。大体、あんなの普通じゃないのか？

ともかく、そんな疑問は置いておいて、俺は一言こう言っただけ。

「帰れ」

『ええ！？』

いや、雪穂はわかるが、なぜ洋介まで驚く？しかも、洋介の方、同時に残念そうな声も出してたし……。

「あなた、私の言うことが聞けないの！？」

「お前、なんで拒否するんだよ！？」

「なあ、洋介、お前、何をたくらんでいる？」

と、言つと、俺の首に手をまわして、耳元で、

「だって、泊まってもらえるってことは、お風呂覗きに、夜のキャツキヤウフイベント、朝のラッキースケベがあるじゃないか！」  
と、熱弁してきた。

それに対して、俺は半眼になりながら、

「お前、ここは武偵校だぞ？もしそんなことになったら、お前の命はないぞ？」

「もし、それを眺めて息絶えたとしても、『わが人生に、一片の悔い無し！』って言いながら死ぬる自信があるぞ？」

「……………」  
ダメだ、こいつ早く何とかしないと……………。

「あなたたち、何話してるの？結局、泊まってもいいの？それとも……………ダメ？」

うぐう、最後だけ上目使いと涙目の併用技を使いやがって……………でも、俺は……………」

「断る」「はい、喜んで！」  
……………は？」

「おい、洋介、何勝手に決めてるんだ？」

「天斗、お前こそ何勝手に、お断りしてるんだ？」

フツ、貴様がそう言うのであれば……………」

「あー、今日の夕飯、どうしよっかなあ……………」

「めんどくさいし、もう銃のメンテしなくても良いかあ？」

同じようなことを考えやがって……………。

「別に、俺はほとんど使わないし、かまわねえよ？銃くらい、自分でメンテできるしな」

「夕飯ぐらい、その辺で買えるし、自分の好きなもの食べるし、お前と違って金は余裕ある方だしなあ……………」

そして、互いににらみ合ったのち、洋介が玄関から出ていく。出ていく間際に、

「今日は、他の部屋の友達のところと一緒にうまいもん食ってくる

よ、当分頭冷やしやがれ」

なんて、捨て台詞を吐きながら。だから俺も

「まったく、俺の飯が恋しくて帰ってくんじゃねーぞ！」

とだけ言い返しておいた。たく、人のありがたみも知らずに…………。

「で、私はどうするべきなの？」

「だから、帰ってくれ。少なくとも、俺は変に目をつけられたくないんだよ。一般高校に行くためにもな」

そう言つて、玄関を閉めようとする。それに対し雪穂は、

「少し待ちなさい」

と、ドアを強制的に止める。というか、力強いな、こいつ…………。

「なんだよ、泊める気はな……………」

そう言つて、彼女の目がおぶさげでないことに気づき、口を紡ぐ。

「あなた、メアドを交換しなさい。また狙われたりした時のためにね」

ああ、なるほどな。合理的だ。

「わかった」

そう言つて、赤外線通信で、メアドを交換する。

そして、彼女は部屋を去っていった。

そして、その夜のこと…………。

窓に、何かがあたって、ヒビが入る音で目が覚める。

さて、知っている人もいると思うが、武偵高校の窓は、防弾ガラスだ。それにヒビが入る。それが意味するに…………。

そう思うと同時、遠くから射撃音が聞こえた。そう、銃撃だ。しかも、音の響き方からして、ライフルで…………着弾からの時間を計算するに1km以上だろう。

俺は、ベットから降り、ダッシュで窓から離れる…………。そして、着たままの防弾制服の腰に、ファイブセブンの入ったホルスターを付ける。さらに、ベットの下をあさり、小型の折りたたみナイフと、刀を取り出す。そのまま、廊下に出て、玄関へ向かう。その最中に、

つい数時間前に教えてもらったアドレスにメールを送る。

心は自然と凧いでいた。

「さて、死なない程度に頑張るかな……………」

雪穂は俺の連絡を受けて、その情報から狙撃手スナイパーのいる方向を割り出し、それに狙われないようにと、ワイヤーなどを駆使して、男子寮入口……狙撃手スナイパーから、正反対方向にあたる位置に来てもらった。

雪穂の格好は、B型装備……完全に戦闘態勢だな……。

「さっきの銃声は聞こえたわ。中空知さんに急ぎよ鑑定してもらったら、使われているのはシャイタックM200だそうよ」

「シャイタックM200か……確か、ギネス記録を持つてるんだっけ？距離は詳しくは忘れたけど、2500m位から1発で人を殺したとか……。」

「厄介な銃だな……」

「そうね。でも、相手は移動していないそうだし、大丈夫だと思うわよ？」

「なんでわかるんだ？」

「それに、暗いから気がつかなかったけど、インカムつけてるし……。」

「ああ、中空知さんに中継とってもらってるの。あなたもつけなさい」

「そう言つて、俺にもインカムが渡される。小型で、片耳に引っ掛けて使うような、そこらへんにありそうなものにアンテナをつけたような見た目だった。」

「なあ、これしかなかつたのか？」

「そう、片耳に引っ掛けて使うような品だ。いつ外れるのかわかったもんじゃない。」

「仕方ないじゃない、それしかなかつたんだもの」

「……仕方ねえか……。」

「で、敵さんの大体の位置は？」

「学校の校舎、その屋上ね。距離は大体1760mってところかしら？」

「だいぶと遠いんだな……」

四捨五入すれば2kmの距離だ。完全にこちらが不利な状況だが、  
どうするか……。

「どうやって接近するつもりだ？」

その問いに対して、雪穂は、

「……………あなたって、弾丸斬れたわよね？」

「なあ、あれはあくまでその人の目と、銃口の向きが見えてるから  
出来るものなんだが、わかるか？」

そう、簡単に言うならば、相手の姿と銃が見えていないと対応のし  
ようがないのだ。目の動きで、どこを狙うかの予想を立て、銃口の  
向きを予測して刀を移動させて、銃口が向けられたときに微調整を  
する。

そしたら、勝手に弾が切れる訳だ。

「……………無理なの？」

「無理」

「どうしても？」

「無理」

2回も聞かなくても無理なものは無理です。

「チツ、使えないわね……………」

「そう言うくらいなら、代案無いのか？」

そう言うと、雪穂は目を泳がせまくって、

「あ、あるわよ、あなたの頭では理解しきれないような、あなたな  
んて必要ないようないい作戦がね」

そうかそうか、……………さてと、

「じゃあ、帰るか」

「なんでよ!？」

だって……………ねえ？

俺はわざと意地の悪い顔を浮かべ、言ってる。

「俺、必要ないんだろ？」

「え、そんなこと言ったっけ……………あ!？」



「じゃあ、頑張ってくれよー、適正な金は後で払うからー」

そう言いながら、後ろに向けて手を振りながら、寮の入口に戻ろうとする。が、

「ま、待ちなさいよ」

雪穂が顔を赤くしながら、うつむいて、

何だ、まさか、観戦でもしてろっていつのか？それとも、やっぱり手伝えとでも……？

「やっぱり手伝って……」

やっぱりだね。

「仕方ないな……」

そういうと、雪穂は顔を上げて、さもうれしそうな顔をした。まったく、わかりやすいな……。

「で、何をするんだ？なんて言っても、作戦なんて、無いんだらう？」

「うっ……」

ですよね……。

打つ手もなく、2人で固まる。すると、インカムの向こうから、

『作戦がないのであれば、大型のシールドを持って強行突破してはどうでしょう？』

と、中空知さんからの代案が出されたが

「シールドって、どこにあるの？」

『アムド装備科に行けば、いくつもあるかと……』

……アムド装備科か……。どのみち、相手の射線上に身をさらさなければいけないことには間違いない。

ん、そういえば、雪穂は前衛フロントの仲間がいないから、俺を引き入れたんだよな……。それなら、ひよっとして……

「なあ、雪穂」

と、俺が問いかけると、頭から煙が出そうなほどに考えていた雪穂が、鬱陶しそうにこつちを睨む。でも、そんなことを気にしている暇はない。

「お前の友達とか、チームに狙撃手<sup>スナイパー</sup>つて、いる？」

その問いかけに、彼女は一瞬、訝しげな顔をしたが、すぐに意図を察し、

「なるほど、眼には眼を、歯に歯を、狙撃手<sup>スナイパー</sup>には狙撃手<sup>スナイパー</sup>を、ね」

まあ、そういうことだ。しかし、こんなふうによく引用として使われるこの言葉だが、元は昔の法律の基本理念らしい。確か、ハンムラビ法典だったかな？

とにかく……

「で、いるのか？」

「いるわよ、Bランク武偵で、1人だけ。その人にアシストに回ってもらいましょう」

「ああ」

これで、本当に戦える。本当に、戦いが始まる。

さて、ここで一つ言っておこう。俺は、スナイパー狙撃手同士の戦いを知らない。イメージでは、相手の位置を補足したら、撃って、撃ち返しての繰り返しだと思っていた。でも、実際は……………

俺と雪穂は、男子寮の壁にもたれるように、体育座りをしていた。その横では、ホームM1500を抱くように持った少女がいた。髪は伸びてボサボサで、目は半分死んでいるようだ……………。

……………伊藤真奈美……………スナイプ狙撃科のAランク武偵だ。

「で、いつまでこうしてるんだらうな……………」

「さあ、私に聞かれても……………」

そう言いつつ、雪穂は、伊藤さんに目を向ける。俺も釣られて見てみると、口を開けて、上の空だった。

「なあ、こんなんで大丈夫なのか？」

「これでも、ちゃんとランクはAなんだけど……………」

そして、沈黙。さつきから、インカムの向こうの中空さんもダンマリしている。

話すこともなく、かれこれ5時間が経っていた。相手からのメッセージも、こちらからのアプローチもなく、ただひたすらにこの状況である。

俺は、さつきから何回も声をかけても反応してくれない彼女に、もう一度声をかける。これでダメなら、朝まで耐えよう……………。

「あの、伊藤さん？」

「何……………?」

完全に上の空。もう、話を聞いているのかどうかすら怪しい返事だ。今自分が狙われているのを忘れそうなほど間の抜けた返事……………。なあ、この人ほんとにAランク？

「いや、そろそろ何かしないのかなー、って思ってたさ」

「そっかぁ……………そうだよねえ」

話聞いてないな、この人……………。

「じゃあさ……………」

あれ？話聞いてたんだ。それに、何か代案を出してくれるのかな……………？

「君がここから出ていけば良いんじゃないかなあ……………」

「代案が予想の斜め上を突っ走った!？」

いや、俺が狙われてるから、ある意味で解決だけど、俺が死ぬ。死んじゃうよ、俺!？」

「だって、相手の詳しい場所わからないし、それを知るには、撃たせないと意味ないし……………ファア……………ねむねむ……………zzz」

「人の命左右するようなこと言いながら寝るなよ!？」

どうすればいいんだろ……………俺。とりあえずは……………」

「起きてくれ、お願いだから起きてくれ。俺の命がマジで危ないから、起きてくれ!」

「えー、めんどい」

「いや、だから人の命を左右することをめんどいって……………」

「それにい、相手に近づけたら、君たちのほうが強いはずだしねえ……………」

いや、近づけないから、困ってるんだけどね……………。

もう、ツツコミを入れる気力も失せてきた……………。

仕方ない、俺も少し仮眠をとるかな……………。

俺が仮眠から起きてても、状況は好転せず、ただただ膠着状態だった。

しかし、腹が減ってきたな……………。まあ、夕飯食べてないし、仕方ない。それに、そんな気持ちを抱いているのは俺だけじゃな……………  
…なんだろう、すごい食欲をそそるような臭いが……………。

「はう、まだまだカツ　ヌードルが美味しい季節だなあ……………。やっぱりカレー味大好き……………」

「サラッとカツ　ヌードル食べてるうっうっうっう!？」

伊藤さんが、なんの前触れも無くカツ　ヌードルをすすっていた。もう、叫ぶしかないよ。しかも、後ろからもいい匂いと何かをすする音が……。まさか……………

「でも、やっぱり、赤い　ツネは外せないわよね。サクサクの衣、程よいツユの味……………まさに、和ね」

雪穂、お前もか……………。

ん？というか、どこからお湯とか持ってきたんだ？

「さてと、おかわりもらいに行こつと……………」

そう言っつて雪穂が立ち上がる。

「なあ、どこに行くんだ？」

「どこつて、選択教科棟までだけど？」

選択教科棟……………そこつて……………

「校舎まで数百メートルのところじゃないか!？」

「あ……………」

今更感満載である。

「なあ、そこからなら……………狙撃できるか？」

俺は後ろにいる伊藤さんに振り向きながら問いかけるが……………

「……………ぐう」

寝ていた。

「ねえ、伊藤さん、選択教科棟からなら、狙撃できる？」

「ふえ……………?ああ、多分できるよお」

その間の抜けた返事が、今だけはすごく頼もしく見えた

選択教科棟……その3階に位置する家庭科室やってきた。しかし、ここに来る方法は至って単純だった。ただ、そこらへんに植えられている景観を良くするためと、柵の代わりとして使われている木……名前は知らないが、高速道路とか、国道の中心を示すのに使われている……それに隠れながら進んでいくだけだった。

真奈美さんから双眼鏡を借りて窓から校舎の屋上を見ると……俺のことを狙っている『敵』の姿が見えた。

「あいつが今回の敵？前回のとは違うみたいだけど……」  
と、雪穂が言うが、全く持つてその通りだ。前回の男は、巨漢。その一言だが、今回の敵は、性別は同じ男にしても、巨漢の男と比べると、かなり小さく見えた。

その男は、まだこちらが移動したことに気がついていないのか、地面に寝そべったまま、俺たちの元いた男子寮の方をライフルのスコープで眺めている。少なくとも、人形だとか、そういうものじゃないのがわかる。呼吸のための体の上下。時々、ほんのわずかに動く体。5時間もあそこでああしていたんだろうな……。まさに、『芋』だな。

でも、これなら……

「なあ、さっき来た風に、校舎まで行けないかな？真奈美さんには後衛に回ってもらってさ」

「そうね、それがいいかもしれないわ」

「そうしてくれると嬉しいなあ。こつらがライフルを出したら、バレルや、スコープが何らかの光を反射させるかもしれないしねえ。それでバシて、こちらが狙われると厄介だもん」

各自、同意見か……。

しかし、今の季節が秋でよかったぜ。ギリギリ葉っぱが落ちてないおかげで、隠れられるんだし。そのまま、学校に行けるほどの長

さの木がずっと続いている。

「じゃあ、行くか？」

「ええ、行きましょう」

そう言つて、家庭科室を出ようとしたとき、

「でも、気を付けてねえ」

と、真奈美さんが言った。気をつけるつて、狙撃手<sup>スナイパー</sup>は、あんまり近距離戦ができないとか、なんだとか言つてたのに、なんでだろう？その疑問には、すぐに答えてくれた。

「ああ言う風に、『芋』になっている人の近くには、畏があつたりするから。その畏にかかつて、そっちがどうなつても、私は知らないよお？」

眠そつな声でさらつと怖いことを言いやがる。少し寒気を感じながら、俺たちは家庭科室を後にした。

そして、校舎内……………。

「なるほどね……………」

学校の窓を見たら、真奈美さんの言葉の意味を理解した。

窓の入ったところに、仕掛けられているもの……………赤外線タイプの、動体センサーだ。それがいくつも仕掛けてある。そこから、アンテナのようなものが出ている。ということは、少なくとも、近辺に俺たちに危害を加えるものがないと思うのだが……………。

しかし、そこで雪穂は  
「偽物ね」

と言いながら堂々と開けやがる。

「おい、いいのか？本物だったら、やばいんじゃないか？」

「別に。それに、学校には、遅くまで人がいたはずだから、そんなに大きな準備はできないはずよ」

ああ、それはそうかもしれない。学校には少なくとも、9時くらいまで人が残っている。そして、最初の狙撃は10時だった。1時間で、畏を仕掛けて、狙撃箇所へと移動……………。1時間で、大量の畏を

仕掛けるのには無理がある。本命をいくつか絞って、あとはダミ  
ーにするだろう……。

そのまま、校舎に侵入する。

そして、すんなりと、屋上まで行った……。おいおい、トラップ  
なんて無かったじゃないか……。

とにかく、この先にその狙撃手スナイパーが居るんだな……。そう思いつ  
つ、雪穂とタイミングを合わせて、扉を一気に開けた。

「……………そこまでだ！」

そう言った俺の視界の端で、フェンスを飛び降りていく誰かを見た。  
屋上には、シャイタックと、そいつの被っていたであろう、布だ  
けが寂しくはためいていた。

「……………逃げた!？」

フェンスに駆けよると、そのままグラウンドを疾走していく男の姿  
が見えた。俺は慌ててインカムに向かって叫ぶ。

「真奈美さん、行きましたよ！」

が、向こうから聞こえてきたのは……………

「……………ぐう」

「寝てる!？」

仕方ない、ここからハンドガンで……………。ダメだ、ここからハンド  
ガンであいつに当てる自信がない……………。

俺は、最後の希望であり、俺よりも遥かに腕のいい雪穂を見てみ  
ると……………

「さて、当たるかしらねえ」

と、男の置いていったシャイタックを構えている。

「なあ、お前、狙撃できるのか？」

その疑問に対して、雪穂は

「大丈夫、私、狙撃もしたことあるんだから」

と、笑顔で答えた。そして、彼女がボルトを起こし、薬莢が排出さ  
れ、ボルトを戻す。薬莢が地面に落ちる。そして、彼女は引き金を



引いた。瞬間

一瞬、何が起きたのかわからなかった。分かったのは、シャイタクの機関部から、炎が出てきたこと。そして、雪穂が吹き飛ばされたこと。

バラバラの破片になって、金属音を響かせるシャイタク。それとは違い、柔らかい『何か』が地面にぶつかって、鈍い音を立てる。

「雪穂!？」

驚いて、俺は雪歩に駆け寄る。

彼女の体からあふれ出てくる赤い雫。それでも、雪穂は、

「早く……行きなさい、あいつを逃がすなんて……許さないわよ？」  
息絶え絶えに、俺を叱咤してきた。

「お前、大丈夫なのかよ!？」

どう見ても、大丈夫には見えなかった。顔自体は、軽い切り傷だが、体に、機関部のパーツが刺さっている。さすがに、B型装備でも、こんなものが刺さって大丈夫な訳がない。それでも彼女は、  
「行けっていつてんでしょ……、私は、友達に来てもらうから……。  
大丈夫……私にはそういう人もいるんだから」

無理に笑顔を作って俺を見てくる。だから俺は

「ああ……死ぬんじゃないぞ!」

と、言って走り出す。

彼が走り去った後で、私は中空知さんに、アンビュラス救護科の友達を呼んでもらうように言って、インカムの電源を切った。

「まったく、何が『ああ……死ぬんじゃないぞ!』よ、死亡フラグじゃない……。」

そうつばやいて、私の意識は闇へと堕ちていった。

俺は、ひたすらに走った。走って走って、校舎を出て、絶望した。捕まえると約束した敵を、見逃した。

考えれば、当然だろう。学校の屋上を飛び降りていった敵に、畏にはめられてから、1分は経っていた。そんなの、見つかったほうが奇跡だった。

でも、止まるわけにはいかない。止まっていたら、見つかるものも見つからない。だから、俺は走り続けた。

付けてあったはずのインカムもいつの間にか外れ、中空知さんの耳も頼りにできない。でも、俺は走り続けるしかなかった。

せめて、学園島を隅から隅まで探して、諦めるとしたら、そこが最低ラインだ！

疲れるという感覚がなくなり、ランナーズハイにしては心が冷めたまま無感情に、あるいは、感情的に走り続けた。

しかし、現実とは無情だった。

結局、学園島を半分も探さないうちに足がもつれ、こけた。立ち上がるうにも、うまく立ち上がれない。生まれたての鹿のようだった。

車の通らない道路の真ん中に仰向けで大の字になって、胸を激しく上下させ。それでも、酸素が足りてない。

限界。それだけのこと。普段から鍛えていなかった、その結果。当然のこと。でも、だけでも……………

「チクシヨウ……………」

悔しかった。ただただ、悔しかった。

そんな俺の耳に、誰かの歩く音が聞こえた。隠す気のない、むしろ、聞かせようとする音。

そして、姿を現したのは、綴が取り逃がしたという巨漢の男。

「また……………会ったな」

俺は、まるで友であったかのように、親しげに話しかけた。それに対して、男は以前とは違い、無感情に腕を持ち上げる。そこに握られているのは、1日前に見たDEだった。

俺、死ぬのかな……………。

そんなことを思っても、もうあの状態にはならない。

俺は、既に1人だったんだ。待っている人なんて、誰もいなかった。

色あせた記憶の、家族との思い出。そして、その家族が2人を覗いて全員殺された、あの時。俺ともう1人残っていた、俺の妹。その、最後の笑顔。最後の言葉が、聞こえた。

おかえりなさい、お兄ちゃん。

そうだな、これからそっちに行くんだし、その言葉であってるのかな……………。

そんなことを思いながら、俺はゆつたりと笑った。

男の動作が、ひどくゆつたりと見えた。引き金に力がかかり、それが引かれた瞬間にガスと、眩い光が銃口から溢れ出す。そして、そのガスと光の中から、銅の色に輝くフルメタルジャケットの357マグナム弾が見えた。

そして、その弾丸は俺の頭を……………

その時、俺の視界の端を徐々に奪っていく何かが見えた。走馬灯というには黒く、壁のように見えた。そして、それは弾丸を覆い隠し……………。

俺からは見えないが、弾丸を弾いた……………であろう、甲高い音が聞こえた。

『弾いた』ということは、エネルギーがその何かに移るわけで……………

「わぶっ!？」

俺の顔面にそれが当たり、変な声が出る。当然、かなり痛い。

「まったく、まさかと思って来てみたら、お前、本当に何したんだ

「？」

この声は……………。

鉄板……………なのかわからん板をどけると、そこに立っていたのは、俺の親友である江坂洋介だった。

## 2・6（後書き）

すみません……………本当にすみません……………。なんだかんだで、戦闘がどんどん長引いております。気長に読んでくださっている方々、もう少し、もう少しだけ耐えてください。恐らく、次回には天斗君のかっこいいところが見れる（かもしれない）ので……………。

「洋介……………お前……………」

俺が呆気にとられている間、洋介は腰から銃を抜き出した。

S I G P 2 2 0 ……………。その現行型の、さらに競技用モデル。

街灯でステンレスフレームが鈍い銀色に煌めく。

「まあ、お前は少し休んでな。俺みたいなんでも、止めることくらいはできるからな……………」

洋介のその言葉が、無駄にかつこよく見えた。俺の体は予想以上に疲れてるようだ……………。自分の緩むのがわかった。

「じゃあ、少し休ませてもらうわ」

そう言つて、俺は息を整えようとす。が、

「ああ、そうそう」

と、洋介が、もう一度こちらを見る。俺は、訝しげ（であろう）視線を向けると、洋介は笑つて言った。

「俺の射撃の成績は、最低ランクだぜ？」

「全然安心できねえよ!？」

むしろ、お前がどうなるかが気になつて安心できない。

「後ろに弾丸行つても、知らねえから（笑）」

「いや、もつと心配になつたわ!というか、口答で（笑）言つな!」

「おい、お前ら、別れの挨拶は終わったか？」

と、突如横槍が入ってきた。言わずもがな、巨漢の男だ。少しイラついた口調で言ってきているのは、俺たちが全く関係ない話をするからだろう……………。

それに対して、洋介は軽げに、

「あーあー、わかつたわかつた。構つてやるから、ほい、天斗、その盾こつちによこせ」

と、男から目を逸らさずに、手だけをこちらに出してくる。しかし、盾つて一体何のことだろうか？

「さつき、お前に投げつけた、あの板だよ」

なるほど、さつき俺の顔面にめり込んできたアレのことか。

そう思っ、自分の足元にある板を洋介に投げつける。投げる瞬間に持ってみてわかったが、この盾、異常に軽い。色も、黒っぽいし、カーボン繊維でも使ってるんだらう。洋介はそれをごく普通に受け取って、前に構えた。

「さて、俺の準備はOKだぜ」

と、洋介が挑発気味に言うと、巨漢の男は無言でこちらに駆けてきた。さつき、あの距離で弾丸を弾かれたから、至近距離のアル・カタに切り替えたんだらう。しかし、こいつ体の割に、かなり早い。そして、至近距離まで接近した洋介に、銃撃を食らわせようと引き金を引く。そのとき、洋介がにんまり笑うのを、横顔でだが俺は見ただ。洋介がこの顔をするのは、大抵イタズラをしたときに見せる笑いだ。

そして、甲高い音が響きわたる。弾丸がはじかれてどこかに飛んでいったんだらう。

男の顔は驚愕の色を見せ、洋介の顔も笑顔でさらに歪む。

そのまま、巨漢の男は引き金を引くが、洋介の体は弾丸の衝撃にのけぞるところか、片手で銃を構えながら、笑っている。

あの盾、一体何を使ってるのか……。

ともかく、洋介が銃を構えて狙っているのは……。男の右腕……銃を握っている方の腕だ。そのあたりを狙っている。洋介が引き金を引く。が、弾丸は洋介の狙ったであろう腕には当たらず、その遙か後方にある街灯の柱にぶつかり、火花を散らせた。

「洋介、どこ狙ってるんだよ!？」

「んー、少なくとも、右腕を狙ったんだがなあ……」

と、洋介が男のアル・カタを盾で凌ぎながら答える。

あの距離で、腕を狙って外す。さすが、射撃成績、最低ランカーと言ったところか……。

で、そろそろいいかな……。

「さてとっ」

そう言いながら、俺は体を起こす。腰の刀に手をかけ、抜刀する。鞘走りと共に、煌めく刀身が現れる。

俺の愛刀、自作した刀だ。こいつを作るのに、わざわざ中3の夏休みを全部投げ売った。親のツテで、刀鍛冶のコーチ役も呼んで、出来たのがこの刀だ。ついでに、名前はまだ決まっていな。

男が、鞘走りでか、刀身の煌めきでか、俺の方を横目で見て、そのままDEをこちらに放ってくる。目線で予測し、銃口で確定し、弾丸を斬る。はじめられた弾丸が、後方に飛び去る。つい最近考え出した、天斗式柳生新陰流奥義、弾丸斬りだ。厨二感満載なのは、気にしないで欲しい。

男は、これを予測していたかの如く、動揺するでもなく、そのまま4発ほど撃ってくる。これも、銃口を参考にして、必要最小限の動きで斬る。1発は外れた。

そして、俺は一気に前に駆ける。男は、マガジンを排出して、再装填した瞬間、こちらに向き直る。ロングタイプマガジン、弾数が何発か増えたことは解った……。

そして、それを理解した瞬間、俺は男を中心に、左回りに回り出した。男もそれに合わせてDEを動かして、撃ってくる。俺は、その中の数発をあしらいつつ、徐々に近づく。

男の顔に、徐々に焦りの色が見え始める。俺が1歩近づく事に、狙いはどんどんと雑になり、顔に汗が浮かべているのがわかる。

そろそろか……。

俺は、洋介に合図を送る。

「今だ！」

「おう！」

その声と共に、少し離れた木の陰から洋介が突っ込んでくる。それに合わせて、俺も、一気に距離を詰める。

「なっ………!?!?」

男が驚いているのは、洋介がいきなり出てきたからか、それとも、



2人同時に突っ込んできたからか。とにかく、男が動揺しているのはわかった。だから、俺はその隙に刀を逆袈裟に振り上げる。が、昨日と同じ動きだからか、危なっかしくも1歩下がってよけた。俺はその場に立ち止まり、肩に掲げるように刀を構える。

男はその俺の動きを見て、理解できない。という顔をしていたが、その直後、その表情が驚愕に変わる。

「うおらあ！」

と、少し情けない声で精一杯突っ込んできた洋介とぶつかる。そして、そのまま前に倒れてきた男の腕のDEに意識を集中する。そして

「はあ！」

と、一閃する。

刀で銃弾は斬れる。なら、銃は斬れるのか？その結果がどうなるか。そんなことを俺は知らない。だが、斬れるという確信もあった。

鉄と鉄の擦れる音が刀を通して、俺の背筋に変な感覚を伝えた。

男のDEのバレルが、半分ほどになって落ちていく。俺は、刀に付いてもいない血を、血振るいをして、鞘に収める。

DEのそのの落ちた音と、俺の刀の鏗なりが、男の敗北を決定させる音だった。

2・7（後書き）

やっと書けました。あそこまで行っておいて、さきがなかなか出てこなくて……。

え？戦闘シーンが低クオリティ？……キノセイジャーナイカナア、  
ハハハハ。

## 2 - 8 (前書き)

最近、投稿スピードが格段に落ちて来てるなあ……………。

さて、いろいろと面倒なので、ことを一気に説明しよう。

男は、再度綴に引きずられていった。今度は、蘭豹付きという、ある意味では、男に同情したくなるような状況だった。

生きて帰って来いよ……………？

と、俺は柄にも無く、敵に対してこんな感情を抱いていた。

そして、洋介とともに、寮に帰り、ベットに入るころには東の空が明るくなり始めていた。寝れたのはものの2時間ほどだった。しかも、こんな日に限って蘭豹と綴の授業がある。寝ずに耐え切る自信がまるで無いが、コーヒーと、ミン イアでがんばろうと思った。

そして、授業中。俺はもの見事に机に突っ伏していた。

日常が戻ってきた……………。

あの狙撃手スナイパーを逃がしはしたが、もう一人の男から情報が引き出せるだろうと、そんなことを思っていたら、耳に聞きなれた足音が：

…………… 蘭豹の靴であろう音が聞こえてきた。

さて、ここで選択肢が出てくるわけだ。起きているのをアピールして、紛らわしいと殴られるか、起きずにあらゆる音、攻撃に耐えられるか。どちらに転んでも、悪い結果ではある。が、俺はたいてい後者の方を選ぶ。後者ならば、攻撃される率は低いからだ。と、言うわけで俺は衝撃に備える。

そして、足音は俺の真横に来て、止まった。周りもシンと静まり返り、蘭豹からは銃をホルスターから抜く音すら聞こえない。ただ、紙を丸めるような音が鳴り、その音源が机の中に移動しただけだ。

クラス内の全員がざわめく。その音にまぎれて、蘭豹の足音が遠ざかる。

一体、何をしていたんだ……………？

気になった俺は、こっそりと背後に歩いていった蘭豹を試してみる。

何事もないかのように歩いている。でも、俺が寝ているのに気がつかない訳がないのだが、なんでスルーしたのだろうか……。そんなことを思っていたら、蘭豹がこちらを見てきた。その目には、いつものような、粗暴だが生徒のことはある程度考える……。そんな物はなく、かわりに『不安』のような感情が見えた。

何があつたんだろう……。少なくとも、いいことがあつたような雰囲気ではないが……。

そんなことを思いつつ、重くなってきた瞼を、特に抵抗するでもなく閉じていった。

## 2 - 8 (後書き)

久しぶりの投稿のくせに、短くてすみません。学生としては、いろいろあるのです。

資格試験に、修学旅行、果てはPCのお引越しまで。

おかげで、現在執筆しているのは『自分専用』PCと言うことになりました。

でも、投稿スピード上がるかなあ……（むしろ、ネットゲがサクサク動くからそっちに集中しそうな……汗

その日のその後、綴の授業も寝ていても何もされなかった。

クラス内で、俺が先生を手籠にしたとか、弱みを握ったとか、そんな噂が流れ始めたが、気にも止めずに寝ていた。机の中に入れたものは、今は自分の制服の内ポケットの中だ。取られる率は少ないだろう。大体、自分から物をとっていく人は居ないので、問題ない。はずだ。

そして、放課後。教室から人が消え、西の方のビルの間に太陽が沈むころ、俺は机の中に入れられていたそれを読んだ。

それは、一般人が見ればただの英語や数字の羅列だが、武偵用の暗号コードだと、俺にはすぐに理解できた。が、その内容を見たとき、やってしまった。と思った。

内容はこうだ。

『授業終わったら、すぐに武偵病院に来い！』

命令形である。しかも、律儀に『！』までついている。

「……………」

今から行っても大丈夫なんであろうか、これ。いや、行かなきゃいけないのはわかってるが……………。頭の中で、蘭豹がM500を構えて、こちらを睨み付けている光景と、つい2日前の追い掛け回された光景が頭に浮かんで、俺の顔から血の気が引いたのがわかった。

俺は荷物を持ち上げ、教室から飛び出す。廊下をダッシュし、救護科<sup>ピュラス</sup>まで走り続けた。つい数時間前も走り続けたせいもあってか、疲れがどつと押し寄せるが、息も整えずに救護科<sup>アシピュラス</sup>の横に併設されている『武偵病院』に入った。瞬間

「遅い！」

と、叫ばれた。

言わずもがな、蘭豹だ。その顔には青筋が浮かび、文字通り『キ

レ』そうだった。2つの意味で。

「すいません、さっき読んだばかりでして……………」

「ああん？」

「イエ、ナンデモアリマセン」

怖い。純粹に怖い。これ以上無いほどに怖い。

「まったく、あんた大事なことをいくつも忘れとるで？」

「……………」

はて、なんのことやら？

「雪穂、どうなったか知つとるんか？」

「……………！？」

そういえばそうだった。

「彼女は……………雪穂はどうなっていますか？」

その質問に対し、『やっとか』と、呆れた顔を作り、ため息をつきながら、蘭豹が答える。

「無事やった。ケガは頭部に浅い裂傷と、左腕部にも同じような裂傷と、軽い火傷や」

「よかった……………」

心の底から安堵するというのはこんな感じなんだろう。体から力が抜ける。

「まったく、あんたって奴は……………」

と、蘭豹が、呆れたような声と再度のため息と共に、俺の右腕をつかんだ。

「王子様が倒れてどうするんや」

「ありがとうございます……………」

と、自分でもわかるほどに、力なく答えた。王子様と言われても、ツッコミを入れる気力がない。それほどに、ここ数日は疲れていた。

「……………まったく、無茶しよるわ」

「なんででしょうか……………」

「なんでもないから、とつと立ちな」

と、俺の腕を放す。俺は体制を立て直しつつ、なんとか立ち上がる。



しかし、今何を言っていたのかが気になるな……。

「ところで、あんた、そろそろお嬢様がお待ちやで」

と、言われて、雪穂のことをまた思い出す。そして、俺は先生に――  
礼して、

「ありがとうございます」

その言葉だけを言っつて、振り返らずに、走り出した。が、すっかり忘れていた。振り返らずに、格好よく行こうと思っていた俺は、その足を止め、

「あー、雪穂の病室つて、何号室ですか？」

本日何度目かわからない、蘭豹のため息をまた聞くことになった。

## 2 9 (後書き)

現在、テスト期間です。

え？大丈夫なのかって？もう赤点しか見えてない……………「冗談です。」

## 2 - 1 0 (前書き)

遅れていた分を、かなり突貫で仕上げました。

雪穂の病室の前で、俺は考えていた。

『一日放っておいたパートナーへの反応はどうすればいいのか』  
ということ。

雪穂のことだ。『今更だ！』みたいなことを言って、何かを投げつけるか、フルメタルジャケットの何かを飛ばしてくるか、いつそこらへんにあるものや、えげつのない刃物を構えて襲いかかってくるかもしれない……。

考えてみると、恐ろしいな……。

そんなふうには身震いしたら、ドアに体がぶつかった。あ、やつちまった……。そう思っても、時既に遅し。中から、

「誰………？」

と、大人しげな声が聞こえてきた。しかし、大人しげになっても、雪穂の声はよくわかる。

さて、どうするものか………。

また、中から声をかけられる。

「ねえ、誰がいるんでしょ？」

それを聞いた俺は、観念して、考えなしに雪穂の病室に入った。

ドアを開けたそこに居たのは、普段の印象からは正反対の見た目をした雪穂だった。

カチューシャを外し、少し上げて短く見えていた前髪が長くなった印象を受け、白っぽい患者服を着て、なびくカーテンを見ている姿は、大和撫子とも、深窓の令嬢とも言える見た目だった。

俺はアニメや、ドラマのワンシーンを思い浮かべたが、相手が雪穂であり、武偵であることを思い出した瞬間、その妄想は消え失せた。

雪穂はゆっくりとこちらの方をむいて、少ししおらしげな顔をした。

「私、あなたを守るって決めたのに……ごめんなさい」

やっべえ、ある意味でストライクゾーンのご真ん中だ。

「き、気にすんな。今俺は生きてるし、無傷だ。それだけで十分だよ」

「でも、守ったの私じゃないし、何もできてないし、役たただし……」

だめだ、こいつ早く何とかしないと。そう思うほどに、今の雪穂はネガティブで、どうしようもなかった。

「まったく、お前はいろいろ気にしすぎだ。そんなふうには悔やむなから、次頑張れ。武偵憲章第7条『悲観論で備え、楽観論で行動せよ』だったっけ？とにかく、俺は生きてるんだ。だったら、もっと楽に考える。それでもって、まずは自分の傷を治せ」

そう言っつて、俺は雪穂の頭に手を置いてしまっていた。

雪歩の体がピクリと反応する。ヤバイ、殴られる。そう思っつて、手を頭から退け、

「す、すまん」

と、反射的に言っつておいた。それに対しての雪穂の反応は、予想外にも

「別にいい……」

と、頬を赤らめながら、目を逸らした。

「……………」

気になる反応ではあったが、殴られなかったので良しとしておこう。

「しかし、お前も落ち込むんだな」

そう言っつと、雪穂はジト目で、

「どつという意味よ」

と言っつてきた。そのジト目が、可愛らしくて面白くて、俺はつい吹き出してしまった。それが気に食わなかったのか、雪穂が怒ったよつな顔で、

「何笑っつてるのよ、蹴られたいの？」

と言っつてきたので、俺は素直に返事をしてやる。

「いや、やっぱり雪穂は明るいほうが、雪穂らしい。と思ってな」  
会ってほんの数日だが、こんなことを思えるほどに、馴染んでいた。  
俺の返答に対して、雪穂は、顔を赤くして

「な……何言ってるのよ……私だって終始暴れまわってるわけじゃないんだからね！」

そんなことを言った。そんな雪穂に、俺は背を向けて、

「じゃあ、また来るな」

「！」

そう言っつて、病室を出ていった。背後では、雪穂が顔を赤くして、言葉にできない言葉を発していたのがわかった。それに思わず頬を緩めながら、病室の前を離れようとしたら、背後から声をかけられた。

「もう、いいのか？」

「ああ。とりあえず、これ以上巻き込むわけにもいかないな」

「そうか……」

「お前にもまた、迷惑かけるな、洋介」

「気にするな。むしろ、お前にそう言われると変な感じなんだよ」

そう言いながら、苦笑する気配。

「さて、と。俺を狙ってる奴は、どこのどいつなんだ？ 場合によっては教務科の指示を仰ぐことになるぞ？」

そう言ったら、苦笑する気配がなくなり、逆に空気が張った。微弱的な電流が、体を駆け巡る感覚。

「お前、3年前の、あの出来事を覚えてるな？ ショックで忘れてたなんて無いよな？」

その言葉を聞いて、俺は顔を歪め、あの時のことを思い出した。

血にまみれた部屋。ナイフと銃を持った男が3人。倒れているのも3人、俺の師であり、父である、柳生天男。そして、母の和子。最後に、俺の妹、楓だった。父と、母はピクリとも動かない。その倒れた体を中心に、半径1mほどの地だまりができています。ただ、

妹の体から、血の類は見えない。かわりに、男たちが頭を押さえつけ、動かないようにしている。

楓は、リビングのドアの前で立ち尽くしている俺を、ほとんど動かないようにされている首を動かして、たった一言、こう言った。

「お兄ちゃん、おかえりなさい」

と。その瞬間、甲高い音が聞こえ、妹の体が一瞬跳ねた。それを見て、俺は理解した。

妹が殺された。

楓が殺された。

理解した瞬間までは覚えている。しかし、そこから先は覚えていなかった。

気が付けば病院のベットの上で、頭や腹に包帯を巻かれていた。

当時、ニユースを騒がせていた強盗グループが、俺の母を人質にして、父を殺し、そのあと母を殺し、帰ってきた楓を押さえつけ、俺が帰ってきた。そして、楓も殺された。それを、俺が捕まえたらしい。

ニユースで、俺は英雄ヒーローとして扱われた。でも、何一つ嬉しくなかった。

ずっとずっと、泣き続けた。学校に行かなくなり、成績は落ちて、お金もなくなっただけ、それでも毎日毎日泣いていた。

あのときから、俺は一人だった。

気が付けば、俺は手から血がでるほどに、強く、固く、拳を握っていた。

「覚えているか聞いただけで、思い出せとは言っていない。抑えろ、天斗」

「ああ、すまない……………」

「仕方のないことだがな。聞いた俺も馬鹿だった。あんなこと、そ

「う簡単に忘れられる訳もないよな」

「忘れたら、お前は人じゃない。と、少し冗談めかしてか、それとも本気でか走らないが言っつて、洋介が続ける。」

「ともかくだ、あの時お前が捕まえた男たちが、ある組織に入っつていてな。で、お前と戦っつている間に機密を漏らしていたらしい。それを聞いたお前を、今更ながら殺っつておきたいんだとさ」

「忘れてるのに、面倒な話だ」

「で、どうするんだ？こんな話をマスターズ教務科に言いつけるか？」

「まさか……な」

「そう言っつて、俺は再び歩き出す。」

「日常なんて、もう戻らないと、このとき理解した。」



## 2-10 (後書き)

夜中、テスト勉強をほっぽり出して、書いてしまった分です。

ほんの少し、グロ表現が出ているので、ご注意ください。って、あとがきで言っても遅いかw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3887x/>

---

輝き出す原石

2011年11月27日03時18分発行